

【解説】

明るい町にむかって疾駆する

新船海三郎

本書には、日本のアジア太平洋戦争を考えるうえで欠かせぬ二作を一挙に収めた。大部のものになったが、ひとつながりの物語として読んでいただきたいと思う。両作の発表は、「日本三文オペラ」が早く、『文学界』一九五九年一〜七月、「ロビンソンの末裔」が『中央公論』一九六〇年五〜十一月である。収載にあたっては背景となっている時期のうえからも「ロビンソン……」を先にした。

じつは、わが家もまた戦後の北海道開拓組である。敗戦の年の六月、大阪空襲で焼け出された一家は郷里の広島県呉市に帰り、父ひとり大阪に残った。どのように誘われたのか判然としないが、「ロビンソン……」を語る都庁会計課員の「私」と同じように、甘い言葉に乗せられたのか、期するところがあったのか、家族に黙って開拓団に加わった。ひと冬を北海道で過ごした父は翌年、私の母と姉兄三人を連れて海を渡った。やがて、私と弟が生まれた。

物語の開拓民は、東京の罹災者たちだが、北海道への開拓入植（集団帰農）は、敗戦直前の七月六

日、東京の二四九世帯一一三九人を皮切りに、八月末までに東京、神奈川、愛知、大阪などから九次、計一八〇〇世帯、八九〇〇人が渡道した。

「その名も拓北農兵隊／北の朝希望に開けて／いくよわれらの拓北戦士／拓く沃土に新生活の／君に幸あれ栄あれ」と、「拓北農兵隊を送る歌」に当初こそおくられたが、歌う方も聞く方も果たしてそれほど希望があったか。その後、復員兵たちの輸送で中断され、一〇月に入って再開された。父は二一日、七八〇人で北海道西海岸沿いの炭鉱の町・築別に向かって大阪駅を発った。その後、静岡発札幌行七七九人、大阪発旭川行九八二人、上野発旭川行六七四人、京都発網走行九八〇人、京都発渚滑行八二〇人など、翌年八月末で一万三三三世帯、おおよそ五〇六万人が海を越えた。

作中にもあるように、彼ら彼女たちはなんども眉に唾しながら、何とかなると一縷の望みをかけて「北海道集団帰農者募集要項」を見たのだろうが、開拓民にはさらにわかりやすく説いた『集団帰農者の葉』というものがあつた。

できるだけ二人以上の働き手が望ましい、移住地までの運賃は保証する、さし当たりは学校などが道で簡易住宅を建設する、一戸あたり一町歩の農地を無償で貸与する、引き続き農業をやる者には一〇〜一五町歩の土地を無償で貸与または付与する、農具や種子を無償で給与し主食糧も配給する、移住後六か月間は一人につき月三〇円的生活費を補助する、北海道の冬は相当に寒いが想像するほどひどいものではない、薪・木炭・石炭等が豊富で屋内は却ってしのぎやすい、「来れ、沃土北海道へ 戦災を転じて産業再編成」と至れり尽くせりの、眉唾もいいところの文書である。

この『葉』は、わが家のことを調べていて、北海道立図書館に残っている関係資料の中から見つけた。元になっているのは、敗戦の年の三月に政府が決定した「都市疎開者の就農に関する緊急措

置要綱」である。ますます逼迫する食糧事情に対応しようと、空襲で焼け出された都市住民を農村に疎開させ、生産に従事させようという魂胆のものである。

そうでもしなければ、日本中の口が干上がりそうだった。南方はおろか朝鮮・満洲・中国からの物資輸送は絶え、食糧ストックは焼失、燃料不足で生産は減少、魚の配給が滞り、米は雑穀やイモまじりでも一日三一七グラムの配給量を確保できず一割削減を決定したものの遅れ遅れになった。

ちょうどそのころ、北海道では応召者が続出して労働力不足になり、田畑がありながら作付けできない耕地が一六万ヘクタールにものぼっていた。なんとかせねばと民間有志や北海道選出の貴衆両院議員らが、都市罹災者を援農で受け入れたいと政府に要請した。

戦災者の措置や食糧困窮に悩んでいた政府は、渡りに舟と話に乗った。そして、「援農」ではうまくみに欠けると、勝手に「入植」方針に切り替えた。五月の次官会議で「北海道疎開者戦力化実施要綱」を決めるや内務省は道庁との協議に入った。協議というより押しつけ、受け入れの強要である。机上の計算は怖ろしい。「北海道ニハ農業ニ於テ尚五十余万町歩ノ未利用地アリ。之ガ積極的ナル活用ヲ図ルハ、戦争遂行上、真ニ喫緊ノ急務ナリト謂フベシ」（句読点は新船）と一気にたたみかけてきた。

ものには順序がある。広い北海道で未利用地がいうほどあるとはいえ、鋤を入れればすぐに田畑に変わるというものではない。測量に始まって地質や水利の適地を調べ、いけるとなったら道路をつけて入植、開墾となる。最低でも三年はかかると言われる。敗戦間近の混乱期とはいえ、明治維新時の報復的移封でも受刑者開拓でも、屯田兵開拓でもないのである。事情が分かる道庁は、一応は無理だ、準備できないと抗弁したが内務省は聞く耳を持たない。道庁幹部の大半は内務省からの

出向者であつてみれば、肯うのも時間の問題だった。いずれにしても、民への目や思いなどひと欠片もなかった。

こうして、東京からの開拓民たちの悲劇が準備された。あとは本編が語るとおりである。読者のなかには、作者の作り話も混じっているのではないかと思われる方がいるかもしれないが、敗戦翌年の十二月八日の北海道新聞は社説「開拓入植者の受入れについて」でこう述べている。

「北海道の戦災者および引揚者を対象とした緊急開拓は戦時、戦後を通じて何らの態勢も整わぬうちずるずるべつたり今日におよんだというのが、その実情である。…略…入植に際して公約された食糧はもとより営農資金の貸与、農機具など一切のものが封じられたまま、結果としては共同移民小屋へ極端にいつて犬猫同様にほうり込まれ、歟だけで開墾せねばならなかった…略…」

社説は、この物語の開拓民が入った上川地方のこととして、「残り少ない衣類を金に換えたり、その日の食糧と交換したり、それすらできぬものは実にカタクリ、フキ、ヨモギなどの野草でからくも生命をつづけて来た」とものべ、「土地だけ与えれば開拓できるのだといった投げやりが見られなかったか、大いに疑いなきを得ない」と政府や北海道庁を批判している。

野草で生きのびるとは作中にもあるが、「犬猫同様」の扱いとはさすがに開高も書けなかった実態である。

マルクスは、ロビンソン・クルーソーの物語に、資本主義の発生してくる過程がもつとも単純明快な形で描き出されていることを見てとったといわれる。生産物が資本にかえられ、その資本が投下されて次の生産物を生み出し…、資本の原資蓄積である。

開高健は、敗戦の報を津軽海峡を渡る船で聞いた現代のロビンソンたちに、戦争を引き起こした

政府や政治の本質を見ている。政治家や官僚の「力」の表裏を嗅ぎとっている。そして、作品を書いている戦後一五年ほど経っても、変わらぬそれを敲いている。

戦争へ突き進んだものと敗れたあとの処理を図ったものと同じであってみれば、民は一向救われないのも当然だろう。とはいえ、この物語が全編にただよわせるしたたかでそこはかとない開拓民たちのユーモアはどうだ。そのエネルギーこそ政・官への抵抗の軸といえまいか。もちろん、現実はその簡単には動かない。来年植えるジャガイモは十中八九うまくいくまい。万事承知の開高は、それでもそう語らせて物語を閉じた。民が負けたままでは歴史が腐るとでもいわんばかりである。

「日本三文オペラ」が一九二〇年代末ドイツを背景にしたベルトルト・ブレヒトの「三文オペラ」を意識し、武田麟太郎が一九三二年に著した「日本三文オペラ」を念頭に置いていることは、まちがいない。前者はワイマール共和国末期、つまりヒトラーがほとんどなく政權を掌握する時代であり、後者は日本がアジア太平洋戦争へと突き進む初動のころである。

二作が戦争前であるのに対して開高は戦争後を書いたといえなくもないが、三作はいずれも、社会の底辺にうごめく、泥棒と乞食と淫売婦や、吉原の客引きの女房にカフェの女給とその情夫、安酒場のコック、安来節の女、毒消し売りの少女にクビになった映画解説者、さらに、フクスケをはじめめっかち、ゴン、タマ、ラバ、オカマ、自転車、トウジョウ、玉やんなどと差別語まじりで見在では到底使用不可の名が並ぶパッチたちという、有象無象の庶民の無尽蔵に近いエネルギーを捉えていることが共通する。

開高は「日本三文オペラ」を書く前年の一九五八年、「裸の王様」で芥川賞を受賞した。が、その

直後から極度の鬱状態に陥った。受賞後第一作は芥川・直木賞に深く関わっている文藝春秋社の『文學界』に乗せるという不文律のような依頼が果たせず、開高は講談社の『群像』に出していた原稿を『文學界』にまわした。編集長の大久保房男が激怒し、以来一六年間、開高は講談社と絶縁状態になった。

開高は「日本三文オペラ」について、自筆年譜にこう記している。

「前年の夏、ノイローゼを腫らすために大阪の泥棒部落へ行つたときの経験をもとにして書いた。部落のなかへ入ろうにも入りようがなくて困っていたところ、ある新聞社にいる友人の友人がこの部落のある班の親玉を呼んでくるからと言うので、難波の駅で待っていたら、向こうからやつてきたのが妻の詩人仲間の金時鐘であつた……略……」

これが事実なら、開高は金時鐘の手引きでアパッチ部落に潜入し、おそらく数日か数十日か、いまにも倒れそうで倒れない平行四辺形のあばら家で耳をそばだて目を凝らし、夜陰にまぎれて杉山鉾山に忍び入り、鉄塊を担いで一散に走つたのだろう。そしてそのあとでは、牛一頭の「角と皮と骨とふつうの肉」を除いた残り、いまようのホルモンともなかなか言いがたい臓物一式を焼き、密造のマツカリを呷つたのだろう。ジャンジャン横町で見知らぬ女に声をかけられ、一飯の恩義を感じてアパッチ部落に足を踏み入れたフクスケは、開高の目と手足であるといつて差し支えないと思う。

そうでなければ、ただ聞いた話やちょっと見ただけではとても書けない迫真力を説明できない。とはいえ、体験したら書けるというものでもない。

「フクスケがなげなく屋台をのぞいてみると、七輪のまわりには串刺しにした内臓の山がアセチ

フクスケが最初の働きをした翌る朝のアパッチ部落である。内蔵の山、アセチレンの灯、あぶらっぽいけむり、トウガラシの香り、巨大な牛の胃や腸、血の泡、放埒と殺気、わけのわからぬ賛歌……漢字で書くところをかなにして、男たちの喋る声が染みこんでくる。開高は、まったく共感している。頭ではなく腹が共鳴、共振している。

同時に、開高はただ猥雑と醜怪を見ただけではなく、そこに「平等」を見ていることにも注意が必要だろう。しかもそれは労働に応じてのものである。

も、ブツの掘り起こしにかかる者も、動き回る男たちに水を売る者も、改造荷車にブツを積んで突っ走る者も渡船で運ぶ者も、重すぎて沈んだブツを潜ってすくい上げる者も、分業と言えはいえるが、平等である。しかも、手指や足を欠損した障がい者たちも朝鮮人も日本人のルンペンも混じり合い、何らの差別もなく正当に評価される。炭礦で労働組合をしていたという男は、それらを見て「……能力に応じて働き、労働に応じて支払われるは、こぎゃんよかこつ、なかないな。ここは地上天国ぞ」という。

なるほどそれだけを見ればそうであろう。しかし、この男が喝破するように、ここには「方向」がない。

前述の佐々木は、「日本三文オペラ」と「パニック」「ロビンソンの末裔」の三作を開高の初期の代表作とし、いずれも同一のモチーフ、「食べる」ということ、あるいは食べるための条件の絶対的不足、つまり食糧の絶対的窮乏ということの基本において発想されている」と指摘している。佐々木は、「食べる」という生きることの原初的な形態は、文明化した人間には醜惡な行為と見え、それほどまでして人間は生きなければならぬのかという絶望的な疑問を持つ。と同時に、ただ生きるために発揮される「食べる」とことへの怖ろしいほどのエネルギーにもまた驚嘆する、とのべる。

この二律背反、アンビヴァレンツこそ開高の本領というべきであるが、前述の炭礦で労働組合をしていた男に作者の開高がいみじくも言わせたように、生きること賭けたアパッチのエネルギーは、組織されざるがゆえに奔放であるが、方向がない。時代が混沌から脱して秩序だつてくるととたんに右往左往する。支配権力の側が厚い壁となつて粉砕にかかってくるとひとたまりもない。

開高が作品のはじめのほうで、

「これほど都市機能を損なう、ただ面積の浪費というだけで、しかもどうにもこうにも度しがたい広大な愚劣さというものは、日本全国をさがしてみても、この大阪の杉山町と、あとは東京の日比谷公園の濠の対岸だけの二箇所しかあるまいということに結論がおちつく」

と書いているのは、ふと思いついたというものではない。ほんの数年前に、アパッチといわず人間集団の膨大なエネルギーが、「日比谷公園の濠の対岸」の存在のために無慚に浪費され、滅形させられたにもかかわらず、その場所に残り、住人は生きていることへの齒嚙みであり指弾である。「日本三文オペラ」が問うのは、その「広大な愚劣」に対して人間エネルギーは向かわなくていいのか、である。

暗い闇から明るい町にむかって全速力で疾駆せよとは、あのときのアパッチたちの決心であるが、いまへの呼びかけのように私には聞こえる。人間エネルギーの悲惨な浪費は二度とごめんだからである。

なお加えて述べておきたいことは、アパッチたち朝鮮人に向けた開高のやさしさである。「十円玉カト思タラピル瓶ノ栓ダツタ」と道を歩きながら日本語を勉強するゴンを見る眼、「やつぱりそんなに朝鮮人ちゆうことが気になりますか？」とアオモリへ声をかけ、しまったと思うフクスケの心中には、彼らへの不当、理不尽な差別に憤る開高の心底も重なっている。

(しんふねかいさろう・文藝評論家)